

## 子規と滑稽 (2)

八塚一青

前稿で子規を近代俳句の父と書きました。その偉大な仕事を評して、芭蕉と並び子規も俳聖と呼ばれます。ただ、俳人の長谷川權氏は著作の中で、小林一茶が近代俳人の最初の人であったとして、「正岡子規はこれまでいわれてきたような近代俳句の創始者ではなく、一茶からつづく近代大衆俳句の中継者として位置づけられるだろう」（長谷川權『小林一茶』より）と指摘しています。

子規の前に一茶がいた。私はこれはとても重要な指摘だと思います。子規が蕪村の熱烈な支持者であったことはよく知られています。蕪村の句を通して子規は「写生」を見出しました。それを虚子が受け継ぎ、上書きして、現代の俳句に繋がっています。そのようにシンプルに考えられていましたが、実は一茶もいた。どうやら、そう単純ではなさそうです。

子規に一茶を評した「一茶の句を評す」という文章があります。ここにヒントがあります。子規はこのように書いています。（太字は引用）

天明以後俳諧壇上に立ちて、特色を現した者を、奥の乙二、信の一茶とす。一茶最も奇警を以て著る。俳句の実質に於る一茶の特色は、主として滑稽・諷刺・慈愛の三点にあり。中にも滑稽は一茶の独壇に属し、しかも其輕妙なること、俳句界数百年間、僅かに似たる者をだに見ず。

天明期の俳壇で、子規にとってのヒーローは、先の蕪村です。蕪村からそのまま子規はバトンを受け取ったわけではなく、文章にも残しているように隣のレーンを走っている一茶が気になって仕方ないようです。具体的に滑稽味が濃厚な一茶の句をいくつか引いて紹介しているのですが、そこで

この外滑稽ならぬ意匠の句にも、猶多少の滑稽を帯びたるは、その滑稽に深きがためなるべし。

という、滑稽俳句の奥義をさらっと述べています。その例として引いた句が以下

です。

**一文(もん)に一つ鐘打つ寒さかな**

当時いわゆる時の鐘は有料で、鐘の音が聞こえる家は全て一ヶ月に四文を徴収されていたそうです。この句は、徴収されたお金が鐘の音になっているということを詠んだのでしょう。音にも値付けがされている世知辛さ、しかもそれはすぐに消えてしまう。その滑稽と悲哀が「寒さ」に表現されています。

可笑しくはないのに滑稽がある。深きにある滑稽。高みにある滑稽。それは芭蕉がたどり着いた「軽み」に通じるものであり、子規もそこにただならぬものを感じたことが分かります。

ちなみに子規は、「俳諧大要」の中で俳諧史上、今も昔も最高傑作であると評される芭蕉の

**古池や蛙飛びこむ水の音**

について、閑寂や禅の世界を見事に捉えているという人がいるけれど、ただそのままの句であって、古池に蛙が飛びこんでキヤブン（原文ママ）と音のしたのを芭蕉が聞いてそのまま詠んだだけだ、と真面目になのか冗談になのか分からない評をしています。散々、その滑稽を持ち上げた一茶についても気になる発言を残しています。

**真面目な句には佳作が多い。**